

もうひとつの WONDERS



Julian

ジュリアン

親切になさい。あなたが出会う人はみな、  
きびしい戦いのさなかにいるのだから。

—イアン・マクラレン

もしかしたら、自分は星と太陽と  
このバカでかい家をつくったのかもしれないが、  
今はもう覚えていない。

—ボルヘス『アステリオンの家』より

恐怖は夢と同じ。あなたを傷つける力はない。

—ウィリアム・ゴールディング『蠅の王』より

## ふつうってこと

ああ、そう、そう。

わかってる、わかってる、わかってる。

おれは、オーガスト・プルマンにやさしくしなかった！

だからなんだよ。たいしたことじゃないだろ！ 騒ぎたてるなよ。広い世間に出りゃ、みんながみんな親切ってわけじゃない。それがあたりまえ。だから、もういいだろ？ とつとと忘れて気にするなよ。な？

うざいったらない！

やっぱわかんない。ぜんぜんわかんない。おれは五年生で一番の人気者だったんだぞ。なのに、いつのまにか……やっぱ、わかんないよ。なんなんだ。ムカつく。この一年ずっとムカついてる！ だいたいオギー・プルマンなんてピーチャー学園に入ってこなきゃよかったんだ。あの気味悪いちっぽけな顔をかくしておいてほしかった。『オペラ座の怪人』みたいにね。仮面をつける、オギー！ お願いだから、その顔をおれに見せないでくれ。おまえさえ消えれば、すべてうまくいく。

少なくとも、おれにはね。べつに、あいつが楽しけると言ってるわけじゃない。あの顔で、毎日鏡を見たり外を歩いたりするのが楽なわけじゃないな。だけど、それはおれの問題じゃない。おれの問題は、あいつが学校に来はじめてから、なにからなにまで変わっちゃまったってことだ。友だちが変わった。おれも変わった。もう最悪。

なにもかも、四年生のときのままならよかったんだ。あのころは、すごく、すごく、すごく楽しかった。校庭で鬼ごっこなんかして走りまわっていた。自慢じゃないけど、みんな、おれといっしょに遊びたがったものさ。ほんとにそうだったんだ。二人一組でやる社会科の課題だって、どいつもこいつも、おれとやりたがった。それに、おれがじょうだんを言うと、みんな大笑いしていた。

ランチのときは、いつも仲のいいやつらとすわっていて、マジでサイコーだった。そう、ほんとうに完ぺき。ヘンリー、マイルズ、エイモス、ジャック。超サイコー！ すごくイケてるグループ。仲間内だけのジョークとか、秘密のサインまであった。

なのに、どうして変わっちゃったんだ？ なんでみんながこんなバカになったんだか、わからないよ。

いや、じつは原因はわかっている。オギー・プルマンのせいだ。あいつが現れたとたん、すべてが変わったんだ。なにもかも、まったくサイコーだったのに、もう今はめちゃくちゃ。あいつのせいだ。それと、トゥシユマン先生のせい。ほんとうのところ、全部トゥシユマン先生のせいみたいなもの。

## 電話

トウシユマン先生から電話がかかってきて、ママはえらく大騒ぎした。その日の夕食でも、ものすごい光栄なことだって、べらべらまくしたてていたよ。中等部の校長が、おれに新入生の案内役を頼めてもらえないかと、わざわざ家に電話してきた。すごいっ！ 大ごとだ！ ママときたら、おれがアカデミー賞でも取ったみたいに騒いでた。だれが「特別」な生徒なのか、学校がちゃんとわかってくれていて、すばらしいだつてさ。あのころママはトウシユマン先生に一度も会ったことがなかった。先生は中等部の校長で、おれはまだ初等部にいたからね。電話で話した感じではすごい先生だつたつて、ママはほめまくっていた。

うちのママは、学校ではいつも一目置かれる重要人物みたいな存在だった。理事会つてやつのもンバーで、なにやっつてんだか知らないけど、なんだか偉いらしい。それに、いつもなにかのボランティアをやっていた。たとえば、おれがピーチャー学園に入ってから、毎年クラス委員を務めている。ずつとそう。学校のためにいろんなことをやっていた。

おれが新入生の案内役をする日、ママは中等部の前まで車で送ってくれた。学校のなかまでいっしょに行きたがったから、おれは言つてやった。「ママ、ここは中等部なんだよ！」。これでピンときた

んだらう。おれがなかに入る前に、車は行つてしまった。

シャーロット・コデーとジャック・ウィルが正面ロビーにいたんで、あいさつを交わした。ジャックとおれには、仲間内だけで決めた握手のしかたがある。警備員さんにもあいさつをした。それから階段をあがつて、トウシユマン先生の校長室へむかった。ほとんど人のいない学校にいるのは、すごく変な感じ！

「おい、ここで思いっきりスケボーしてもバレないぞ！」廊下で警備員さんが見えなくなると、おれはツルツルの床の上で走ったりすべったりしながら、ジャックに言った。

「えっ、うん」とジャック。校長室が近づくにつれて、ジャックは口数が減つて、なんだか吐きそうに見える。

そして、あとちょっとで階段をのぼりきるつてところで、立ち止まってしまった。

「ぼく、やっぱいいやだよ」とジャック。

おれはジャックのとなりで立ち止まった。シャーロットはもうのぼり終えている。

「来なさいよ！」とシャーロット。

「指図するな！」おれは言い返してやった。

シャーロットは、あきれ返つて見つめている。おれは笑いながらジャックをひじでつついた。おれ

たち、シャーロットにさからうのが好きだったんだ。あいつは、いつだっていい子ぶりっ子！

「こんなの無理だ！」ジャックは両手で顔をこすりながら言った。

「なにがだよ？」おれは聞いた。

「新しい子がだれだか、知ってる？」

おれは首を横にふった。

「知ってるよな？」ジャックはシャーロットを見上げて聞いた。

シャーロットはおれたちのほうへおりてきた。「うん、たぶん」まずいものでも食べたみたいに顔をしかめている。

ジャックは首をふるると、自分の頭を手のひらで三度もたたいた。

「こんなこと引き受けちゃって、ほんとにバカだったよ！」ジャックは歯を食いしばっている。

「おい、だれなんだよ？」おれはジャックの肩かたを押おして、おれのほうをむかせた。

「オーガストって子。例の顔してる、あの子だよ」

おれは、だれのことだか、ぜんぜんわからなかった。

「マジかよ？ 一度も見たことないのか？ このへんに住んでるんだぞ！ ときどき公園で遊んでる。見たことあるだろ。みんな知ってるよ！」

「このへんに住んでないのよ」とシャーロット。

「住んでるよ！」ジャックが言い返した。

「じゃなくて、ジュリアンがこのへんに住んでないの」シャーロットも負けずに言い返した。

「だからなんだってんだよ？」おれは聞いた。

「べつに。関係ないよ。とにかく、あんなんもん、ぜったい今まで見たことないはずだよ」

「ジャックったら、ひどい。あんまりじゃないの」

「ひどくない！ ほんとうのことなんだから」

「どんな顔なんだよ？」

ジャックは答えない。首を横にふって立っているだけ。シャーロットは顔をしかめていた。

「会ったらわかるから。もう行こうよ。ね？」シャーロットは、くるりとむきを変えて階段かいたんをあがると、校長室のほうへと見えなくなった。

「もう行こうよ。ね？」おれは、シャーロットそっくりに言った。ぜったいジャックがふきだすと思っただのに、少しも笑わない。

「ジャック、おい、しつかりしろっ！」

おれはジャックの顔をぶんなぐるふりをした。これにはジャックもほんのちよつと笑って、スロー

モーションのパンチを返してきた。それからボクシングごっこみたいになった。胸をねらってジャブを打ちあう真似。

「二人とも、行こうよ！」階段の上から、シャーロットの声が出た。おれたちを呼びにもどってきただ。

「二人とも、行こうよ！」おれがジャックに小声で言うと、今度はジャックもいちおう笑ってた。

だけど、廊下を曲がって校長室の前につくと、三人ともかなりマジになっていた。

なかに入ったら、保健のモリー先生の部屋で待つようになって、ガルシアさんに言われた。校長室のわきにある小さな保健室だ。待っているあいだ、おれたちはだまりこくっていた。診察台のところに箱入りのゴム手袋がある。風船みたいにふくらませたかったけど、じつとがまんした。きっと二人とも笑ったはずだけど。